

筆といえは熊野を思い、熊野といえは筆を想う筆の都熊野町は、広島市の東二十軒、呉市の北十二軒の地点にある。町の中央部を走る県道は、東北熊野跡村を経て瀬野川町に通じ、西は矢野峠を経て矢野町に達している。またこの県道は毛筆事業協同組合の北東約百米附近(馬橋)から南に分れ呉市に通じており、いづれもバスが頻繁に往來している。

芸南山嶽の中央部に位する熊野町は、海拔約二百五十米の盆地帯で、周囲にわれ〜が幼少の時から床しがつていた古城趾のある城山(五九三米)や登岐城山(四一八、八米)その外堂所山(六八〇米)竜王山(四二三米)石岳山(五五〇、二米)金燈籠山(五三二、三米)がめぐっている。地形は大体南北に長く約八千四百米、東西約五千四百米、城山と土岐城山を結ぶ低



土岐城から熊野全景を望む

右に山麓を見せているのが城山で、中央や左に寄つたところの長い建物が熊野第一小学校。

地帯には、その昔鶴が来り遊ぶと言ひ伝えられた鶴が沢のあるのも趣深い。呉市に落ちる二河川と海田町に通ずる瀬野川も共にその源をこゝに発している。石岳山の東隣掘登岐の松林地帯を源とする泉川は呉市郷原町を経て同じく呉市の廣大川に合流している。

気候は瀬戸内海性の気候を呈し良好である。気温は広島や呉等の海岸都市に比べれば一、二度は低いであろう。着物一枚は違ふと外来者は言っているが、冬期、海岸地方が雨天の際、本町では小雪をまじえることがある。台風の襲来は日本の年中行事であるが、その被害は江戸時代には度々記録しているようであるが、最近はいず

れにしても海岸地方とは恵まれている。

熊野町は、大正七年町制を施行し、本庄村（現呉市）の平谷、川角を昭和六年に合併して現在に及んでいる。村の代表者は明治五年（一八七二）庄屋にかわつて戸長となり、二十二年（一八八九）戸長制廃止初代村長として世良保次郎が就任した。以下村（町）の首長と主な行政的事項は次のようである。

代	名称	氏名	就任	事項
一	戸長	神藤 徳孝 佐々木裕四郎 佐々木高仙 佐々木亮之輔	明治五年 〃 六年八月 〃 七年三月 〃 十二年六月	〇 地租改正 〇 学校建設 註、明治十年頃までは制度が度々変り、戸長を他町村に求めている例があるが、この場合は上記の人が副戸長として村の政治を担当している。
二	村長	世良 保次郎	〃 二十二年六月	〇 町有林を各戸に二反歩宛貸与、殖林奨励
三	〃	中井 環	〃 二十六年五月	〇 伝染病隔離病舎設置
四	〃	佐々木 亮	〃 三十年五月	〇 稲虫発生予防
五	〃	井上真一郎	〃 三十二年三月	〇 交通路改修の始め 〇 盆踊りの歌詞修撰
六	〃	中井 環	〃 三十六年一月	〇 矢野峠開通 〇 共同苗代の政令廃止実現（佐々木亮） 〇 熊野小学校御山神社境内に新築移転
七	〃	世良 実三郎	〃 三十八年七月	〇 町有山林保護及び教育基本林設定 〇 熊野青年団、在郷軍人熊野分会発足
八	〃	伊藤 太三郎	〃 四十三年一月	〇 本町に初めて電燈設置
九	〃	三池 清人	〃 四年二月	〇 県道熊野神山峠間完成
十	〃	世良 実三郎	〃 四年十一月	

代	名称	氏名	就任	事項
一	町長	阿原 臣	大正六年一月	〇 熊野一円に電灯設置 〇 町制の施行 〇 米騒動事件 〇 小学校に硬筆採用、毛筆奨励の陳情書提出 〇 熊野町毛筆品評会設定 〇 熊野追分実業補習学校設置 〇 追分校へ高等科併置 〇 熊野町図書館設置 〇 熊野伝染病院移転新築 〇 熊野商工会設立
二	〃	才津原 積	昭和四年三月	〇 熊野商工会案内発行
三	〃	伊藤 忠兵衛	〃 五年二月	〇 熊野昭和西道路開設 〇 矢野道路改修事業開始 〇 平谷、川角合併
四	〃	阿原 臣	〃 六年十月	〇 第一回全国書道展覧会開催 〇 筆まつり始まる 〇 青年学校開校
五	〃	梶山 寿四郎	〃 十年十月	〇 大凶作（十四年）
六	〃	伊藤 実雄	〃 十四年十一月	〇 熊野第一国民学校移転改築 〇 土地改良、開墾事業成る
七	〃	諏訪本 光三	〃 二十一年四月	〇 農地委員会設置
八	〃	青 盛 齋	〃 二十二年四月	〇 自治警察設置 〇 熊野中学校設立
九	〃	光本 岩登	〃 二十三年十月	〇 土地地方台帳作製 〇 熊野中学校御山神社境内に新築移転
十	〃	井上 寿三	〃 二十五年十月	〇 教育委員会設置 〇 公営住宅建設（五戸） 〇 中学校増築
十一	〃	城本 勝司	〃 二十九年二月	〇 城之廻道路拡張工事 〇 中溝道路舗装工事 〇 呉地大池工事着手 〇 中学校講堂兼用校舎建築 〇 第一小学校講堂建築 〇 第二小学校改築工事 〇 公営住宅建設（六十戸）

熊野の名称については広島県史に「姓氏録に熊野連あり、蓋其裔の居所なり、熊野村に熊野社あり、其祖神なるべし」とあり、熊野の沿革についても窺えるが、芸藩通志には「此村の名は、村内に熊野社を置く、故に名づくかと思へれど、中古は橋賀村とも呼びぬ。はしかは端辺の意にて、那の端に居る義によるにや、さればくまのも、本は限の義、後村名によりて、熊野社を勧請せしやも知るべからず」とあり、橋賀村の名を出しているが、これに対する史料をまだ見ていない。本町にある熊野本宮社は平安末期の養和元年（一一

八一) 紀州から勧請したと伝えられるが、村名によつて熊野社を勧請したとすれば、熊野の名は更に遡らなくてはならない。しかし和名抄(九二三—九三〇)に出ている郷名は当時の安芸郡では漢辨(可部)弥理(三入)河内(小河内)田戸(三川)幡良(?)安芸(府中)船木(莊山田)養隈(矢野)安満(江田島)駅家(?)宗山(中野)の十一郷で熊野の名は出てこない。若しこれに従うとすれば、熊野の起源は案外に新しいのである。そして和名抄以後養和頃までの間に熊野は開発せられたという結論に導かれる。だが問題はこれでおさまらないのである。隣接の矢野は勿論、黒瀬、熊野跡、八本松等にはすべて古代文化の跡が見られるのに対し、独り熊野だけが空白であることはできないであろう。熊野にはこうしたままとまつた遺蹟こそ見えないが数年前呉地区の大池工事の地から石斧様のものが出土したことがある。すべて将来の課題であるが、熊野という名称は熊野の開発を物語る問題であり、その古代における存在は一応信じてよいようであり、系統としてはたとえ紀州と密接な関係(神社、地名等)を持つたとしても、出雲意宇郡から南下した熊野神社の系統であろうという結論を一応下したいと思う。なお江戸時代に至つて熊野、川角、平谷、押込、苗代、栃原、焼山村を熊野七郷と呼んだが、これは何も行政組織を示すものではなく、地形上共に高原の盆地帯にあることと、熊野の面積、村高等が他の村より大きかつた理由にもとづく便宜上の名称であつたと思う。次に熊野町を人口、面積、職業、予算別分類等の数字をもつて概観したいと思う。

戸数及人口調

年	西曆	戸数	人口		備考
			男	女	
文化二二	一八一五	九五二	三、九三六	三、九三六	芸藩通誌による
明治二一	一八八八	一、二四五	六、五二二	六、五二二	広島県史による
大正九	一九二〇		六、五六〇	六、五六〇	国勢調査(第一回)による
昭和五	一九二五		六、八四一	六、八四一	同(第二回)
	一九三〇		六、九一一	六、九一一	同(第三回)

世帯及世帯人数 (昭二五・一〇・一)

人数別	世帯人数
一	一四五
二	二九四
三	三七一
四	三五九

編)

昭和	西曆	戸数	男	女	備考
一〇	一九三五	一九四〇	四、四五六	四、八三五	七、五一〇 国勢調査(第四回)
一五	一九四七	一九四七	四、五六一	四、九一八	七、七四四 同(第五回)
二二	一九五五	二、一五九	四、五六一	四、九一八	九、三三五 同(第六回)
二五	一九五五	一、七七八	三、七九九	四、二二二	九、二九一 同(第七回)
三〇	一九五五	三〇五	六、一九	六、七一	八、四七九 同(第八回)
三二	一九五五	六〇〇	一、二二七	一、三三三	二、五八〇 住民登録による
計		二、一八三	四、七一一	五、〇一九	

世帯数	世帯人数	世帯数	世帯人数
一以上	九、二八〇	一〇	二、二二
計	九、二八〇	二、二二	二、二二
合計	二、二二五	二、二二	二、二二
世帯数	九、二九一	二、二二	二、二二
人員	二、二二五	二、二二	二、二二

備考 昭25・10・1施行の国勢調査結果を集めた昭25 国勢調査報告第7巻(総理府統計局)

備考 大正九年以降各年共十月一日現在

一平方キロ当り人口密度

町	面積(k ²)	一平方キロ当
熊野	三三・七六	二七五
昭野	二七・六一	一四二
矢野	一一・六八	七二
坂野	一一・九三	一〇一
海田	一一・五〇	二、三六〇
中野	一六・一八	二七七
瀬野	三〇・七二	一二五
府中	一一・七七	九六九
船越	三三・三六	三、一七〇

備考 昭和二十五年十月一日施行の国勢調査の数字による。一平方キロにあたり広島県二四七人安芸郡五〇九人

職業別男女別十四才以上就業者数(昭二五・一〇・一)

職業	男	女
専門的技術的職業	七二	三三
管理的職業	一一	一一
事務従業者	一一五	二四
販売従業者	二〇八	一一
農夫、伐木夫その他類似業	一、二三四	一、〇〇六
採石業	四	一
運輸業	三一	一
生産工程従業者及特殊技能工	六八二	七一
単純労働者	一一八	一〇
サービス職業	二八	二六
計	二、五〇三	一、九二七

備考 昭25・10・1施行の国勢調査の結果に依る

熊野町商店数調(昭三・七・一)

職業	商店数	常時従業者(人)	月間販売高(千円)
一般卸売業	五	一六〇	二一、五四三
特殊卸売業	一	?	?
織物衣服身廻品	一	三	二、一七五
飲食料品小売	五	一〇	六、九三九
車輛小売業	四	一	三〇一
家具建具小売	六	一	三八八
その他的小売	一七	四〇	九、五七三
計	一五八	三七七	四〇、九一九

備考 通産省所轄商店統計調査の結果を集計した「昭和31年商業統計調査結果表(広島県総務部統計課)」に依る

事業所及従業者数(昭三〇・一・三二)

事業所	事業所	従業者	計	その他	印刷	紙材	木料	食料	金銀	計	製造品出荷額(千円)
事業所	九	一	一	一	一	一	一	一	一	三	九一、二二七
事業所	九	一	一	一	一	一	一	一	一	三	五九三

備考 昭和30年工業統計調査結果表(県総務部統計課編)に依る

田畑・山林の面積

区分	部落	反別	反	收	実收高	出所
田	吳出地	四九・一	二・二七五	一、〇六八	農林省食糧事務所調	昭和三十一年度の数字による
	中來庭	五一・二	二・二八二	一、一七一	昭和三十一年度の数字による	
畑	初城	八五・九	二・二二一	一、八九九	役場調昭三〇・一・一現在 同右昭三二・一〇・一現在	
	新宮	三五・〇	二・三三二	一、四五一		
	川角	七〇・八	二・一九〇	一、五二九		
	平谷	一八・九	二・一八三	一、三五六		
	計	二二・六	二・〇〇五	九、四四六		
	全面積	一一七町三畝一三歩(四、九七三筆)				
	山林	国有林	二〇九町(中倉山、嵩山、堂所山、石嶽山、山)			
		私有林	三二町(大稜山、初神山)			
		約二、三四七町				

農業経営の規模

規模	面積	戸数
一反未満	六九	一〇九
一反一三反	九四六	四七四
三反一六反	一、八二八	四一六
六反一〇反	一、三二一	一八〇
一〇反以上	一九八	一七
合計	四、三六二	一、一九六
一戸当り	三反六畝	
町内総戸数	二、一八二戸	
内生産者	九、八一二人	
消費者	一、九六六、一八七人	
	九八六戸三、六二五人	

備考 農林省食糧事務所調昭和30.10.20現在の数字による

昭和三十年農産物生産高

種別	作付面積	收穫面積	推定反收	推定実收
稻	四、六二一 ^反	四、六二一 ^反	二、七四四	一、二、六八〇 ^石
水稲	四、六三 ^反	四、六三 ^反	二、七三九	一、二、七〇三
陸稲	一七	一七	一、三三三	二、三〇三
麦	二、四七 ^反	二、四七 ^反	一、七〇七	一、四七 ^反
小麥	二、四七 ^反	二、四七 ^反	一、七〇七	一、四七 ^反
大麥	一、四四 ^反	一、四四 ^反	一、〇七九	三、九四六
裸麥	二、一七 ^反	二、一七 ^反	一、〇七九	三、九四六
計	一、七〇二	一、七〇二	一、〇七九	三、九四六
甘藷	一〇二	一〇二	四七 ^反	一、一〇 ^反
なたね	一〇二	一〇二	四七 ^反	一、一〇 ^反
薯蕷	一八九	一八九	四七 ^反	一、一〇 ^反

備考 昭和31年版広島農林水産統計年誌による

予算(歳入・歳出)の足どり

区分	明	治	大正	昭	和
指数	100	100	100	100	100
額	八四、一四三、三三三	一〇、一四一、四一五	三、一〇一、四一四	一、三七一、一七三	二、二六二、七七一
予算	八四、一四三、三三三	一〇、一四一、四一五	三、一〇一、四一四	一、三七一、一七三	二、二六二、七七一
計	八四、一四三、三三三	一〇、一四一、四一五	三、一〇一、四一四	一、三七一、一七三	二、二六二、七七一

備考 一、単位予算額は円

二、歳入、歳出共に予算額は同一であるので表示の金額はその何れにも該当することになる
三、昭和二十六年以後の増幅が目立つが、これは役場費、教育費、土木費、社会及労務施設費等の歳出増加の反面、インフレ経済下の貨幣価値下落もひびいている

なお毛筆関係の実態については後に述べようと思う。

熊野町の各種官公衙、諸団体その他公衆設備は次のとおりである。

町役場	一	農林省食糧事務所	一
警察署	一	信用組合	一
小学校	二	商工会	一
中学校	一	毛筆事業協同組合	一
郵便局	一	公会堂	九
農業協同組合	一	病院	九
同 共済組合	一	劇場	一

種別	数量	面積	備註
農地	一八七	一〇二	
山林	一〇二	一〇二	
住宅	一〇二	一〇二	
学校	一〇二	一〇二	
商店	一〇二	一〇二	
官公衙	一〇二	一〇二	
その他	一〇二	一〇二	

一	三	一	九
一	二	一	九
一	二	一	九
一	二	一	九
一	二	一	九
一	二	一	九
一	二	一	九
一	二	一	九
一	二	一	九
一	二	一	九